

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 10 日現在

機関番号：32510

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520506

研究課題名(和文) 首都圏方言の基層についての基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental Research on the Base Dialect of the Tokyo Metropolitan Dialect

研究代表者

木川 行央 (Kigawa, Yukio)

神田外語大学・その他の研究科・教授

研究者番号：50327186

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：首都圏方言の基層を探るため、首都圏西端の神奈川県小田原市と南端の千葉県館山市で音声・アクセント・文法・語彙の調査を行った。その結果、東京語の古いアクセントが両地域に見られること、また東京ではあまり見られないラ行音の撥音化などの現象が共通して存在することが確認できた。その一方で共通語化・東京語化が進んでいるのも確かであり、若年層を中心に伝統的な方言が消えつつある状況も捉えられた。

研究成果の概要(英文)：In order to explore the base dialect of the Tokyo Metropolitan dialect, the present study investigated the phonological, accentual, grammatical and lexical properties of the dialects spoken at the western and southern extremities of the Tokyo metropolitan area: Odawara City in Kanagawa Prefecture and Tateyama City in Chiba Prefecture. As a result, this study found (1) that old accent patterns in the Tokyo dialect are observed in the two dialects and (2) that the two dialects share phenomena such as syllabic nasalization in the ra-row sounds. This study also showed that assimilation of the dialects in the two areas into the common language/the Tokyo dialect is in progress, and the original dialects in the two areas has gradually disappeared, especially, among younger people.

研究分野：日本語学

キーワード：首都圏方言 アクセント ラ行音の撥音化 母音の無声化 東京語

1. 研究開始当初の背景

本研究は、現代共通語の基礎となっている首都圏方言の基層を探求することを目的としている。研究代表者である木川と研究分担者である久野は、平成 20~23 年度科学研究費基盤研究(C)「首都圏方言の実態に関する基礎的研究」により、山梨県上野原市・神奈川県小田原市、さらに首都圏に隣接する静岡県賀茂郡松崎町において、調査を行った。これに引き続き、首都圏の方言の中には、東京語では消えてしまった言語現象が残存していることを確かめた。たとえば、音声事項ではアクセントや連濁現象、ラ行音の撥音化など、文法事項では意志・勧誘および推量方言に用いられるべーなど、さらに語彙についても、かつては江戸・東京で用いられていた語が用いられているなど、多くの現象が認められる。しかし、首都圏においても東京語化は確実に進行しており、これらの言語事項も消滅しつつある。これらの事象を記録し、分析することは、急速な変化を起こしている現在でこそ可能な課題である。さらに、現在起こっている変化の過程を記録しておくことによって、言語変化の研究そのものに、言語環境・言語事象を軸とした提言を行うことが可能となると考え、平成 20~23 年度科学研究費基盤研究(C)「首都圏方言の実態に関する基礎的研究」に引き続いて研究を行った。

2. 研究の目的

首都圏各地の伝統的方言は、東京に近接し、かつ基本的に東京方言に類似する点が多いからか、記述的な研究があまり多くない。しかし、現在の共通語、東京語の基盤をなしている、あるいは東京語の古層と共通する特徴を有していると考えられるので、現代の共通語あるいは東京語、さらに共通語・東京語の歴史的变化を考えるときに、重要な位置を持つものと考えられる。例えば、アクセントにおいては、東京の古い型と考えられる発音が東京の周辺地域に残る。その他の音声現象、文法事項、語彙体系などでも、かつて江戸・東京にあった現象が残っている。その一方、いわゆる首都圏は地理的に広範囲にわたっており、それぞれの地域における特徴も見られる。共通語化・東京語化の進む現在、このような首都圏の言葉の基層を中心に記述することは緊急の課題であり、それにより、今後の共通語や東京語の研究、さらに言語変化そのものの研究に、重要な意味を持つものであり、必要不可欠なものと考えられる。そこで、首都圏の伝統的な方言、そしてその変化を記述、保存していくことを本研究の目的とした。また、この補助資料とするため、東京語の古い姿および現在の若者の言語状況もまた、隣接する静岡県における言語の変化についての調査を行った。

3. 研究の方法

まず、先の研究に引き続き、小田原市にお

いて、面接による多人数調査を行った。対象は高年層から若年層までで、調査内容は、ラ行音の撥音化、発音、助動詞べーの使用などである。また、館山市において、小田原市において実施した多人数調査と共通する項目を主とするアンケート調査を、高校生を対象に行った。さらに同じく館山市において、高年層を対象とする文法、音声、アクセント、語彙の面接調査を行った。この他、現在首都圏の大学に通う大学生を対象とするアンケート調査、東京において生育した高年層の自然談話の録音、文字化、過去の録音資料の整理などを行った。

4. 研究成果

(1)神奈川県小田原市方言の調査では、アクセントが東京語の古い型が観察された。これは一般名詞などでも確認できるが、現代の東京ではほとんど見られず古い型とも考えられる地名の尾高型の発音が確認された。この発音は、なじみの深い地名に多く見られる。また「知らない」がシンナイとなるなどの、ラ行音の撥音化の現象は、東京でも、上記の「知らない」のようにラ行音の後に鼻音が来るときにはよく観察される。それに対し、後に来るのが無声子音の時は、「すると」がストのように、促音になる。ところが、小田原方言においては、この場合もストとなる。この現象は若い世代でも比較的よく残っている。しかしその一方、特に女性においては、東京でもよく聞かれるシンナイをも恥ずかしい言葉遣いであるとの評価をしているなど、東京の状況とは異なる。一方館山方言では、今回の協力者については、後にくる子音が鼻音や有声子音の時には、ネンナラ、スンマデモ、スンベ-のように撥音化することがあるが、「する時」や「するから」のように、無声子音の場合は東京などと同じく促音に発音する。ただし、ストなど撥音化する表現を聞いたことがあるとする人もおり、さらに後述の高校生を対象としたアンケート調査では、「すると」をスト、「する時」をストキというとした生徒が、10%前後あり、さらに「聞いたことがある」という生徒とあわせると、55%前後が使わないし聞いたことがあるとしている。これを見ると、館山市においても、鼻音以外の前のラ行音が撥音化することは近年までよく見られたものと推測できる。

(2)小田原市方言には、共通語の「じゃない(か)」に似た働きを持つジャがある。たとえば、「そこにあるジャ」(そこにあるじゃないか)、「やろうジャ」(やろうじゃないか)のように用いられる。これは、東京でも用いられるようになったジャンに類似している。しかし、ジャンとは異なり、後ろにヨ・ネなどの終助詞を後接させることはできない。さらに、現代の東京の若い世代は、「今日雨降るんじゃない」のような推量を表す文でも「降るんジャン」と言うようになってきてい

るが、ジャには、そのような用法はない。なお、この形は伊豆半島の方でも用いられる。先の科研費の研究によって調査を行った静岡県賀茂郡松崎町方言でも同様の使い方が見られ、小田原方言との連続が考えられる。このジャは館山方言においてもその使用が確認された。

(3)房総半島のアクセントは「房総アクセント」として有名である。今回の調査地点館山市は地域によって様相が違ふと報告されているが、今回の調査においては、房総アクセントの特徴は見られなかった。

(4)館山を初めとする房総地方の方言の特色の一つとして、語中の力行音の子音Kが脱落するという現象がある。たとえば、「書け」がカエ、「書けば」がカエバ、「書くから」がカウカラなど、また名詞では「袋」がフー口になるなどであるが、かつての状況を記した先行研究に見られるほど使用はされておらず、語的なものを中心に減少していることが確認できた。

(5)館山市の伝統的な方言における特色の一つとして、意志勧誘を表す場合ペーを使うため共通語の意志勧誘形がなく、共通語の五段活用が四段活用になる点、力行四段活用動詞は、上述のようにK音が脱落するので、ア行あるいはワ行で活用する点、動詞「する」が上一段活用になり、「来る」も未然形がキ、命令形がコーとなるなどいわゆる変格活用の活用形が共通語と異なる点、形容詞のタ形がタケウツタ(高かった)のような形になる点、語的な特色として、小田原方言でもみられたことであるが「行く」がイグとなる点などがある。このうち、五段活用が四段活用になるという点は、今回の調査でも確認できた。またK音の脱落も上記のように認められる。しかし、動詞の場合、語により脱落の状況が異なる。例えば、先行研究でK音が脱落するとされている上一段活用の「生きる」や「できる」のK音の脱落は見られない。また、活用形によって脱落する場合としない場合のある語も見られ、活用形の語幹には、ア行・ワ行・力行が混在する。共通語でサ行変格活用とされる「する」の上一段活用化の現象は、今回の調査では見られず、共通語と同じ形で用いられていた。また「来る」の未然形・命令形についても、共通語と同じ形になっている。形容詞のタ形がタケウツタのような現象は、今回の調査でも確認できている。さらに「行く」がイグである点も、確認できた。以上のように、文法においては、ペーの使用や形容詞のタ形などは根強く残っているが、K音の脱落や変格活用の一段動詞化には共通語・東京語の影響が強く見られる。

(6)館山市では、同市内にある高校の生徒を対象にアンケート調査を実施した。質問項目は、一部館山市方言に見られる方言事象についての質問以外は、小田原市において行った多人数調査の項目と同じである。ただし、館山市での調査は対面調査ではないので、特に

発音については、現状をどの程度反映しているか、という問題がある。しかし、生徒たちの意識を確認することはできる。例えば「店員」の発音であるが、自分がテーインと発音していると認識している生徒が全体の約65%あり、「定員」と発音が同じであるとすする生徒も約50%あった。さらに「原因」にいたっては、約85%の生徒が自分の発音はゲインであると回答している。また、「会員」の発音はカーインであるとする生徒も約36%あり、現代の首都圏の若い世代によく聞かれるとされる発音が、館山においても同様に聞かれる(少なくともそのように発音すると認識している)ことが確認できる。ただし、この発音が若い世代に広まりつつある発音で、かつてはなかったかどうかについては、保留しておきたい。少なくとも、小田原においても、確認した人数は少ないが館山においても高年層(高年層に対しては対面調査で確認している)でもこのような発音が聞かれないわけではない。他地域、また過去の各方言の音声をさらに精密に確認していく必要がある。

(7)(5)で、高年層において、意志勧誘を表すペーは根強いと述べたが、推量を表す場合のペも多く用いられる。しかし、高校生にあっては、ペー・ペ共にその使用者は減っているという良いであろう(基本的には高校生においても、意志勧誘はペー、推量はッペとなるが「しよう」をスッペと言うという回答もあった)。また、その使用者の数は意味によって異なる。最も良く用いられるのは、意志・勧誘であり、推量が少し減るが、これらの用法で回答者の15%前後である。さらに共通語であれば「のだろう」となる場合のペの使用者は5%前後である。これに変わるのは共通語と同じダロ(ー)・デショ(ー)であるが、東京の若年層と同じッショの使用も多い。また「高かった」をタケウツタと言うのは使用が15%程度、聞いたことがあるという回答と合わせると、4分の3の生徒が少なくとも知っているということになり、若年層も意識している方言形と言えよう。

(8)かつて、東京の新方言とされた「ジャン(カ)るが、全国で広く用いられるようになったのと並行して館山の若年層も多く用いている。ただし、東京の若年層で用いられるようになってきた「雨でも降るんじゃないか」を「雨でも降るンジャン」のような推量を表すジャンはまだあまり、多くはない。終助詞的なジャン(カ)するとするのがほぼ全員であるのに対し、推量を表すジャン(カ)を使用するとする回答は、例文によって異なるが、25%~38%程度である。今後増加していく用法と考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

研究者番号：

〔雑誌論文〕(計 9件)

久野マリ子、新東京言語地図点描 - 音韻・アクセントといくつかの項目から -、国語研究、國學院大學、査読無、76、2013、16-40
木川行央、大井川上流域における言語変化 - 30年前の調査結果との比較から -、神田外語大学大学院紀要言語科学研究、査読無、19、2013、17-36

〔学会発表〕(計 9件)

久野マリ子、首都圏方言におこりつつある母音の変化、EJHIB2015、2015、ブラジル・サンパウロ大学
坂本薫、神奈川県小田原市方言のアクセント、「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」研究発表会、2012、日本大学文理学部

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木川行央 (KIGAWA YUKIO)
神田外語大学・大学院言語科学研究科・教授
研究者番号：50327186

(2) 研究分担者

久野マリ子 (KUNO MARIKO)
國學院大學・文学部・教授
研究者番号：90170018

(3) 連携研究者

()